
でいばい youth

TOKIAME

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

でいばい youth

【Nコード】

N5117Y

【作者名】

TOKIAME

【あらすじ】

男女2人の視点から物語を読み解いてみよう。青春なんてくだらなくて、意味の分からないものだけこれだけは言えようか？俺が、あたしが、人生の主人公だ。——現在、シグレ名義でテンミリオンにて公開中の作品。名前のみ変更しております。

プロローグ(前書き)

全部改稿、プロローグ。

プロローグ

青春が青春を裏切りました。

俺の幼馴染（仮）は初めての親友。

あたしの爆弾は一生処理できない。

僕の頭は誰にも理解できない。

私の恋は恋ではなかった。

俺が見た世界は全て美しいもの。

わたしが恋したのは一匹狼？

俺が他人と話すのは自分に線引きするため。

自分の気持ちが理解できないのはいけない？

ボクが恋するのは愛だから。

私が持つのは余計な上背と義理人情。

人が人を信頼できないのも当然で、自分が嫌いなのも思春期で。

愛を恋と呼び、死を生と呼ぶ。

青い俺たちはまだ、青春に翻弄されていた。

王の優越

あの頃、俺　宮本龍紀^{たつき}は王様だった。

当時の俺は七歳。

大人でも扱うことの難しい高等魔術を、難なくやってのけることが出来る、若き高等魔術師だった。

炎を出して自由自在に扱うことが出来るのはもちろんのこと。

物質を創造する事によって文房具や生活用品、電化製品や、更には家一戸を創りだすことだって可能。

それを何処に置いておくのかなど、そういうことは聞かないでくれ。

そんなもの、創ってもすぐに壊している。

どこぞの錬金術とかいうのと違って魔術に代価や対価は無い。

大気中の魔力を少し頂くだけ。非常に便利。

魔術が無ければきつと俺は生きていけないんじゃないかな、と思っていた。

いや、もちろん科学がここまで進歩していなかったら、電化製品を創造できることは無かったけれど。

そして俺は数多い魔術師の中でも貴重な高等魔術師だったから少し、調子に乗っていたのかもしれない。

* * * * *

小学校入学式、当日。

『宮本くんって、高等魔術師らしいよ』

そんな噂、もとい事実が学年中に広まった。

その噂を聞きつけた同じクラスや他のクラスの同級生たちは、自然と俺の周りに集まってきた。

同級生の中に他に高等魔術師はいなかったから俺の所に集まってきたんだろう。

集まってきたやつには俺のとおきおきの魔術を色々と見せてやる。

魔法律、というものがあ、魔術は厳しく取り締まられているが、そんなもの、ばれなければどうってことはない。

ただの、形だけの法律なんだろう？

^俺同級生から注目や羨望の的となってその中心にいた、宮本ブロン

小学生ながらにとても、とてもいい気分だった。

ああ、こんな立場に居座るのも悪くないな、とそう思った。

入学当初から毎日毎日そんな扱いを受けていたためか、いつしか俺は羊を率いる羊飼いだ。

ようするに、学年のリーダー的存在となっていた。

同級生の中に親友、と呼べる存在の人は一人もいなかった。
けれど、悲しくはない。

自分を慕ってくれる人が居る。それだけで俺は満たされていた。

この学年は俺を中心として回っている。

俺が、全てにおいて一番なんだ。

そう考えていた。

敵前逃亡（前書き）

赤石くん登場。

彼の性格が年の割りに大人びてるのは仕様です……；

敵前逃亡

「君に靡なびくつもりなんて、毛頭も無いよ」
「うへえ」

小学二年生になった頃の事。

俺が上位の存在となっても靡かないやつは、当然だけれど学年の
中でも数人はいた。

そいつらも態度では反抗心が俺に向いているのはよく分かるが、
直じかに面と向かって言ってきたのはこいつがお初はつだった。
初めまして。

だからびっくりしちゃって、うへえ。

こいつはニヤニヤとした笑みを浮かべてこそいるが、剣呑な目付
きをしていた。

剣呑、というよりも下等な生物を見下すような目。

……ムカつくなあ。

「ああ、そう。ムカつく？ そりゃそうだよねえ。

今までこうやって言われたこと無いだろ？

言わなくても別に分かるんだよ。裸の王様、宮本龍紀くん。
君のその、表情とか分かりやすいんだよ？」

その話し方と口調でムカついた。

その物言いですらにムカついた。うざい。

なんで反抗してくんだよ。何様だよてめえ。燃やすぞ。

頭の中でぐるぐると、黒い考えや罵倒の言葉が色々と過ぎる過ぎる過ぎる。

俺がそいつの目を見据えながらただ黙りこくっていると、そいつはへらつと笑い、赤石瀬七、と言った。

「憶えといてね宮本くん。僕の名前。

それともこんなやつの名前憶える価値も無いってかな？

憶えといて損は無いよー、きつと。

それじゃまた、お邪魔しに行くよ。君の無意味な行動の邪魔を、ね。

って言っても、同じクラスだけどね！！」

ははは、とそいつ　赤石瀬七、と言うやつは、身を翻し笑いな
がら去っていった。

ていうか、あれ？　あんなやつ同じクラスだったっけ？

ていうか、居た？　という感じ。

まあいいや。後でそこら辺のやつに聞いてみよう。

頭をわしわしと掻きながら、赤石と正反対の方向に歩いて行く。
本当にイライラするなあ。後で目に物見せてやる。

そう思いつつ、こんなことも思った。

それにしても、胡散臭い。

醜い能力

「天才的な才能を持つって、大変だねえ」
「……うるさいっ！」

小学六年生になった頃のこと。

俺は、王の座から蹴り落とされた。
いや、自然と下へ下へと墮落していく羽目になった。

羽目というのはおかしいかもしれないが、王から外れたのは確かだった。

それは俺のせいでもあるけど、世の中の風潮とかのせいでもあった。

俺が王様のような存在になれたのも魔力のおかげ。

ならば、その魔力が無くなってしまえば、俺のこの立場に存在意義自体が無くなるようなもの。

そう、俺の魔力は忽然と俺の中からその姿を消した。

パツ、とスツ、と一瞬にして消えたようなあの不思議な感覚は、今でも憶えている。

だからもう、炎を出すことも、空を飛ぶことも、物質の操作をすることさえもできなくなつた。

そこらへんにいる、ただの一般人。一般people。ピーポー。

そこまで成り下がった俺には当然のように誰も寄り付かなくな
た。

魔力が使えなくなった途端だ。

でもその前にそいつらが俺の周りにいたのは、高等魔術師であっ
たからだけだと気づいていれば

こんな事にはなっていなかったかもしれない、と今更後悔する。

親は頭の良い子と仲良くなりなさい、と言う。

馬鹿な子と一緒にいると悪い影響が出るわ、と言う。

そんな事は全くないというのに。

けれどまあ、それが世の中の親の考え方として定着しているのも
あるから、俺の孤独化に拍車が掛かったのは確かだった。

俺は馬鹿だから、親に仲良くなるな、とか言われたやつは馬鹿正
直に俺から離れていった。

すると結果的に俺の存在、学校の中での価値は

《勉強のできない、運動馬鹿な出来損ないの男の子》

とか、そんな感じになった。
というより、実感が湧いた。

今でこそ、こう気楽に言えるが当時はとても悔しく、悲しかった。

ちくしょう、俺が一体何をしたんだ、と。

家に帰るとベッドに潜り込み枕に顔を押し付け、涙で顔がぐしゃぐしゃになるまで泣き続けた。

嗚咽と涙がこみ上げ枕がぐしょぐしょになるまで泣き続け、そのまま眠りに落ちた。

敗北の感

翌日。

朝早く登校した俺が教室の扉を開けると、目の前に赤石がいた。

「……………うおっ」

「おっはよーございます？ 宮本くん」

疑問系で挨拶した赤石はニヤツと笑ってその場からピョンツ、と一歩分ジャンプして後ろに下がった。

そしていつの日か見た、あの見下すような目付きで俺を一瞥すると、すぐ傍にあった机の上に座った。

「んー、挨拶でさえ返してくれないのかい？ 宮本くん。」

他のクラスから君のためにわざわざ来てあげた同級生に一言もくれてやらないなんて、冷たい男だね宮本くん。

ほらほら、挨拶挨拶！！ 友好的な関係を築くのはまず挨拶からってね」

ははっ、とさも楽しそうに赤石は笑う。

俺が眉を寄せて赤石を睨めば、そいつは不満そうに唇を尖らせる。

「ここまで完璧に無視されるとはおもわなんだよ！！」

これ位すれば大抵は挨拶とか返してくれるのにねえ。ま、それも怒りながらだけど。

何がそんなに不満なのやら。全く理解できないよ」

「……………んな挑発されるように話されたら返す言葉もねえよ」

俺がやっと言葉を返すと、赤石の頬がニヤツと緩み口元はニタツと歪んだ。

赤石が手を上げ、俺に向かって、こっちに来いとも言うように、前後に振った。

手を伸ばせばぎりぎり赤石に触れられるかどうか、くらい近くに寄ってやると、赤石は俺の目をじっと見つめてきた。

相変わらずあの不躑な瞳で見ってくる。

あまりに不快感が募って視線を逸らす。

「お、照れてるのかい？」

「違う。んなわけあるかよ。それにしても、何だよ？」

「お前違うクラスじゃないか。しかも俺に話があるのか？」

「んー、あるといえばある。無いと言えば無い、ってところだね。

君がさっきの僕の言葉に違和感を覚えたかどうかで、これからの話は変わるんだよ」

赤石は、そう言って口笛を吹きだした。

よく知らないが最近流行りのCMの曲っぽい感じがする。

無駄に上手いからそれをBGMに赤石の言葉を脳内で反芻した。

「おっはよーございます？ 宮本くん」

「んー、挨拶でさえ返してくれないのかい？ 宮本くん」

「他のクラスから君のためにわざわざ来てあげた同級生に一言もくれてやらないなんて、冷たい男だね宮本くん」

「ほらほら、挨拶挨拶！！ 友好的な関係を築くのはまず挨拶からっ

てね』

違和感、発見。

「……おはよーございます?」

「違うっ! つーか挨拶は確かにしてなかったけど!」

「嘘。冗談。今のはただの朝の義務的な挨拶だ。」

「……友好的な関係を築く、ってところだろ?」

「せーかいー」

俺が言おうとした事を牽制するように右手がすつと上げられた。

その手に目を向けている間に赤石は、左手をポケットに突っ込んで、小さな袋に包まれた赤い飴玉を出した。

無言でそれを俺の方に投げ渡し、正解賞品でーす、と言ってピーッとしてきた。

「おいしいよその飴。僕の一押し。ちなみに味は梅干。すっぱいよ

ー」

「渋いな、お前」

「渋いよ」

少し文句を言いつつもその飴を口の中に放り込む。

梅干の独特なすっぱさと、少しの甘さが口の中に広がった。

嘲笑の君

ころころころころころころころ、ころ。

ガリッ

口の中で飴玉を転がしながら、俺は友達なんていらねーぞ。と言った。

「あと一年、あと一年我慢すればいいだけの話だし」

「やいぼっち。一年間ぼっちなんて寂しい話じゃないかい。

こういう時は、素直になって友達よろしくとか、なんかあるでしようが。

反抗期なんてカツコよくないんだよ？ 宮本くん」

「強がつてなんか、ねえし」

強がるのは、もう飽きたし。

心の内でもぼそつと呟いてみた。

おお、今巷ちまたで大流行のツンデレだ、とか赤石が楽しそうに言う。

「ふむ、まあとにかく友人は必要としてない。ということだね？
いやはや僕としては友達になってほしいところなだけけど、君が拒絶するなら仕方ないね。

残念、至極残念」

腕を組み非常に残念そうな顔をしながら赤石はぺらぺらと喋り続ける。

「いったい、どうやってたらそこまで話のネタが尽きることなく話すことができるのか、教えてほしい程だ。」

「ちょっと待てい」

今度は俺の番だ、とでも言わんばかりに右手をすつと上げると赤石の言葉がぴたっ、と止んだ。

「飴を舐め終わってもなおすっぱい味のする口の中の息をふー、と吐き出して話し始める。」

「友達になりたいって、どういうことだよ？」

「そのままの意味故に僕から話すことはないよ。」

「強いて言えば、宮本くんといれば面白いことがある！と直感できゅぴーん、ときたからだよ。」

「あの感覚は初恋にも似ていた気がするね。好きです！」

「そりゃどうも」

「そんなことはどうでもいいんだよ。」

へらへらと笑っている赤石を睨みつけると、むすつと膨れた。

「可愛くねえ。」

「それで？ そんなどっかで聞いたセリフ代用して俺の事、心の中で笑ってんじゃねえの？」

「どうせ、なんとも思っていないんだろっなあ。」

嬉々魔術

「まっさかー」

どこかぬけたような声で答える赤石を見やりつつ壁に掛かってい
る時計を、横目でチラッと見る。

もうすぐクラスメイトが登校して来る時間になっていた。

そろそろ居心地の悪い時間帯が来ると思うと吐き気がする。

お腹の辺りが重くなり、ぞわっと腕に鳥肌の立つ感覚がした。

「笑ってはいないんだけれどね……。それじゃあこっしょう。」

僕が今日中に君の何の役にも立たなければ、友達になるのは諦め
るよ。

その代わり！

一回でも役に立てば無理にでも友達になってもらっよ。君が何と
言おうとね」

「……なんだそれ。そんな賭け事みたいなのを俺が受ける必要性と
か、メリットが欠片かけらもないじゃないか」

「たしかにそれはあまりないだろうけれどね、得る者は僕だよ。

友達友達。

そうすりゃ一人でもないし、周りから取り残されることもない」

先程、無理にでも友達になる、と言っていたから俺がその賭けを
放棄しても、多分無理矢理引っ付いてくるんだろっ。

昔から切り替えや踏ん切りが早いなど評されている俺は、諦めて
その賭けを承諾しょうたくした。

単に諦めが早いとか根性が無いとかそこら辺なのかもしれない。

承諾の言葉を赤石に伝えると、心底嬉しそうな顔をし机を蹴飛ばすような勢いで飛び降りて
ギリギリまで俺に近づいてくると、両手を掴んで勢いよく上下にぶんぶん振った。
痛い痛い。

「ありがとう！」

「……本当に役に立つんだか」

「そこら辺はちゃんとやるよ」

そう言つと赤石は左手を軽く上に上げた。

かと思つと、その手には俺の愛用の青い筆箱が乗っていた。

「ほら、早速忘れ物のお届けです」

「……マジ、かよ」

早々と赤石が役に立ってしまった。

あっさりすぎて、何の言葉も出ない。

あまりにも唐突で、やるせなさが俺を支配する。

俺の空いている右手にぽんつと筆箱が乗せられた。

「ほらー、もう。宮本くん友達いないんだから鉛筆なんて借りれないんでしょ？」

気をつけなきゃ足許^{あしすく}掬われる……とは違っけれど、困るんでしょが

「……ありがとうございました」

精一杯の皮肉を込めた言葉と、いつもと違う低い声でお礼を伝える。

その俺の少しの声の違いにも気がついていないであろう赤石は、ニコニコと笑っている。

してやられた、と思った。

赤石は魔術師だから、魔術を使って助けるのは目に見えていたが忘れ物を届ける、という形で役に立たれたのは意外だった。裏をかかれるというのはこういうことなのか。

「とりあえず、今日からよろしく友達」

そう言って赤石が更に強く握った右手を俺は握り返した。

「よろしく、お願いします」

赤石瀬七は不思議なやつだ。

人の事には躍起になっても干渉してきて、何もかも引つ掻き回してくる。

それが迷惑とか嫌だとかどうとか聞かれるとそうでもないんだけど、むしろ感謝することも多々ある。

でもあの性格はなんとかならないかと、日々悩む俺がいるわけだが。

それを抜きにしたとしても、瀬七はやけに俺に構ってくる。

そりゃ、お節介とかそういうわけじゃなくて気紛れなんだろうけど友達になったあの日から、高校二年生になった今日まで

友達でいられて親友になったのは、互いに支え合うとかそういう青春臭いことをしてたせいだろう。

そういうことにしなくては、俺の気遣いの心が痛む。

そんなもの、無いけれど。

あまりに俺に構う瀬七に対して、自分のことはどうでもいいのか？ と聞くと

「はは。自分のことどう思ってるかだって？

一番好きに決まってるじゃないか！」

と言いやがった。ナルシストかよ。

でもまあ、瀬七と俺の友情は不滅だぜ！ とか少年漫画臭いことを言っておく。

それで、場を治めようか。

「おや、おはよう宮本。今日もお一人様ですか。

まったく寂しい奴だねえ。

同情なんて乗り越して一抹の哀れみさえ感じてしまつよ」

少しの気遣いを見せることもなく、気持ち良い程の毒舌で瀬七が朝の挨拶らしきものをしてきた。

……うん、泣きそうだ。耐える俺のメンタル。

瀬七の言葉通り、実際に俺は一人で自分の席に着いて漫画を読んでいた。

しかも、俺の席は教室の中でも一番後ろの一番窓際。

校庭がよく見える。いい天気で何よりだ。

そんな席にしかも一人でいるもんだから、とても孤独な奴に見えるんだろう。

瀬七の席は対照的に一番前にあるが、そんなことを気にすることなく自然に俺の前の席に着く。

「どつやら、高二になっても登校時刻の20分前に学校に来る癖は治ってないみたいだね。

そんなに早く来ても暇だろう？ 特に用事があるわけじゃなからうに。

それとも、あれ？

一人で登校する様を見られたくねえ、とか？」

後ろを向いたまま、椅子の背もたれに前傾姿勢で、もたれ掛かる様な格好のまままで話しかけてくる。

俺は漫画をパタンと閉じてドン、と瀬七の頭を漫画で小突いた。
うるっさい。

「いたっ」

「ふん。登校する時間なんてどうでもいいだろ。癖はなかなか治らないとか言うし」

「そんなこと言っちゃって。」

本当は友達が僕しかいないから一緒に登校する相手が」

瀬七の言葉を遮るようにもう一回、ゴツン！ と今度はより強く漫画を瀬七の頭に振り下ろした。

いつてえ！ とさつきより大げさに喚く瀬七を横目に、また漫画を読み始めた。

これで、少しは静かになってくれたらいいものなんだがな。

衝撃告白

「……ふー、いつたいなあ。

飼い犬に手を噛まれると云うかなんと言うか……。

ところで宮本、ここで突然ですがお知らせがあります」

「なんだよ」

漫画から顔を上げないまま瀬七の声に耳だけを傾ける。

「りーでいんぐナウやつに声を掛けるな、という俺なりの反抗心の表れ。失礼だとは思うけど。」

早く続きが読みたいという考えで俺の頭の中はいつぱいで、ページをぺらぺらと捲り続ける。

しかしそんな少しの願いも叶わず、瀬七に両手で顔をグツ、と掴まれ漫画から顔を上げられる。

「聞いてください」

「はい」

「洩々と話を聞く態勢をとると、実はなあ、と手を離しながら前置きをして、瀬七が話し始める。」

「お前を好きという子がいるという情報を手に入れて。」

「なんて言っの？ あなた、色恋は久し振りでしょう」

は？

「今はエイプリルフルじゃねえぞ」

四月は四月でも四月十八日。

「いやいや冗談ではないし僕がちゃんと調査して手に入れた情報だから！

ていうかエイプリルフルならもつと凄いの吐くから！

僕の嘘と冗談はこんな物じゃないから！ 来年は覚悟しな！」

やめてくれ。どんな嘘と冗談だよ。

溜息を吐いて、少し考える。

……………つまり、あれだろ。こういうのは

favoriteとかlikeとかloveとか、そういうこと
だろ？

favoriteは違うだろうけど。お気に入りじゃないよ。

「知り合いはあまり欲しくないのですが」

「あーそういえば宮本は友達と知り合いは門前払い主義者だったねえ。

いやいや、いい話だとは思っよ？

特にこれといった特徴はないけど、どちらかと言えば可愛い子だし？

ちよつと性格に難有りだけだ」

「性格に難の有る知り合いとか彼女は欲しくないのですが」

「敬語止めてください」

むう、と頭の中でその俺を好きとか言う人について考えてみる。

同じクラス？ 違うクラス？ 同学年？ 他学年？ 性格に難有りってどんなだ？ etc .

俺を好きなんて、そういう話は久し振りすぎて少し考え込んでしまっていた。

そうしている間に時間はどんどん過ぎていく。

「おー、赤石そこは俺の席だどけーい」

「んあーごめーん」

いつの間にかもうすぐチャイムが鳴る時間になっていて、俺の前の席の主が帰ってきた。

楽しそうに間延びした声で瀬七をどーんと押して、俺には一瞥いちげつもくれずに席に着く。

いつものことだから瀬七はそれを見ても何も言わない。俺もなんとも思わない。悲しそうな表情はやめてくれ。

同情は、いらさないから。

「じゃあ宮本、考えといて」

「……おう」

軽く手を振って自分の席に戻っていく。

手を下ろした後、漫画が下で潰れるのも気にせず俺は机に突っ伏す。

ぐしゃり、という音がした。

やっぱり、友達やら知り合いなんかいらねえ。

心から思った。

赤の追撃

自慢ではないが、俺は勉強ができない。多分クラス中の周知の事実。

定期テストやらマークテストやら、それらのテストの順位は学年でも下から数えていったほうが断然早い。

ひーふーみーよーいつむーななやーここのととあー。

そんな極端に下の方ではないけれども。

それでも授業中だけは真面目に話を聞いてノートも取っている、つもり。

だから朝の内に何があるつと、本日も真面目くん風に全ての授業を受け続けた。

あーねむい。

そして場面は放課後へと切り替わる。

「あいやー宮本。片付けが終わったら屋上にカムカム」

「おーけーおーけー」

帰る用意のできた瀬七が気だるそうに俺に声をかける。

そしてそのままフラフラと廊下に出て行った。

その後姿を少し眺めつつ、俺ものんびりのんびりのらりくらりと教科書を片付ける。

屋上とか面倒だな、何の話だろう、やっぱあれ？ 告白話？

考えることはたくさんあれど時間は限られているから人間ってのは不幸だね。

鞆を片手に廊下に出てすぐ傍にある、三階と四階を通って屋上へと続く階段を上る。

俺も瀬七も、何の部活にも入っていないものだから、何ものにも咎められることなく階段をどンドン上り続ける。

俺の所属中の教室は二階にあるから屋上は遠い。

普段から運動だけはしているおかげか、しんどくも何事もなく屋上に入るための扉の前に辿り着く。

計九十四段、お疲れ様でした。

ガチャツとその扉を開けると同時にギィー………という音がする。古い扉特有のあの音。耳が痛い。顔を上げ前方を見据えると瀬七の黒い髪が見えた。あと赤い髪。

ん？ 赤い髪？

「おや、宮本。遅かったね。

またのんびんくらりと片付けしてたのかい。まあいいけれど」

見慣れない髪色を見て呆然と立ち尽くしている俺に、座っている瀬七が話しかける。

瀬七の二言三言にハッと我に返ると、再び思考回路を起動させた。

屋上の床って汚くないか。

いや、そうじゃなくって。

よつこらせ、と瀬七がじじいよろしく立ち上がる。
赤い髪の女生徒も立ち上がった。

「ふむ、その呆然とした間抜け面を見たところ鎮西さんを知らないようだね。

紹介するよ。こちら鎮西ちんせい和南香ななかさん。

名前くらいは聞いたことあるんでねえの？」

「いや……聞いたことない」

脳をフル回転させて記憶の倉庫を巡っても“鎮西和南香”という名前は出てこない。

つまり、聞いたことは無いという事であって、俺がどれだけ同年のやつを知らないんだ、という象徴にもなった。

「おやまあ知らないとは。

それで鎮西さん、こっちが宮本龍紀ね」

「初めまして、鎮西です」

その赤い髪の人物は鎮西和南香、という名前らしく一目見ただけで染めたんだ、と分かるような茶髪混じりの赤い髪と白い肌が対照的で映えている。

その肌の色は一見すると、ヨーロッパとかその辺の白人にもとれる。

目付きは悪いらしく、俺の方をじろつと見つめてきた。

人によっては嫌われているかのように見える。かもしれない。

俺何もしてねえッス。

貫く刺激

「この人はあれですか。俺のことが好きとか言う人ですか」

そう言った途端、先程後ろ手に閉じていた扉にドン！ とぶつかった。

唐突な出来事で何が起きているかは分からなかったが、腹部に鈍い衝撃を感じる。

痛い、と一言だけ発しゆっくり体を起した。

そして瀬七と鎮西のいる方向に目をやる。

「……魔術使うなんて、卑怯じゃないのか」
「高等魔術師ならそんなことお構いなしよ」

そう言って不敵に口元だけを歪めて笑いつつ、しかし、相変わらず剣呑な目つきで俺を睨みながら鎮西がそう呟く。

俺を扉に吹き飛ばしたのは、やはり鎮西のようだった。

んー、魔術使うとは意外だ。多分さっきのは衝撃波だと思う。
あれ扱うのは難しいんだけどねえ。さすが高等魔術師。

過去の栄光を思い出さずんばここに光あれ。

自分でも何言っているんだろう。分からない。

俺はまだ、高等魔術師だった頃を思い出しているのやら。

……ん？ 魔術？ 師？

「あ」

その時、俺の脳に電流走る。

この方、校内で超有名な高等魔術師さんじゃないか。

あー、思い出した。学年代表挨拶とかでよく見るネ。

うん、うん。成績優秀だけど友人少ない俺の類人やつほい。

しかも同じクラスだった気がするような、しないような。

人間ってのはよくわかんないねー。俺も人間だけど。

いつも見かける顔より、目つき悪すぎの猫みたいだから気付かなかった。

「あはは、どんとまいんど宮本。君のこと好きなのは鎮西さんではないんだよ。

っーかこんな美人に好かれてるとか勘違いすんなバカヤロー」

「バカヤロー」

何やまびごっこしてんですかお二人とも。

「それじゃあ誰が俺を……その、好きだというんスカ。

……瀬七、ニヤニヤするな」

俺が一瞬好きとか言うのを躊躇ったせいか、瀬七がニヤニヤしながらこつちを見てくる。やめてくれ。

胡坐ひくまを掻いたまま二人を見上げると、鎮西は言いにくそうに渋り

ながら話し始めた。

「そのアンタを好きなのは、私の友達よ」

「へえ、その友達是谁で？」

「きたがみ ゆりな北上百合奈」

「へえ」

知らねえ。

そう言っていると今度はつかつかと鎮西が自ら歩み寄ってきて、顔面をグーで殴られた。

なんか口の中で血の味がします。あ、口の中切れた。

もの凄い笑顔で殴った鎮西は今、気持ち良さそうな笑顔で仁王立ちをしている。

威圧感が半端ではない。

あー、でも例えば同じクラスだったら失礼な事したな。
失敗、失敗。

「ビンタがよかった？」

「聞くなら殴るな！！」

起訴裁判

「……っていうか、私と百合奈はあんたたちと同じクラスなんだけど」

うっそ。マジで？ 嘘だと言ってくれよ瀬七！

そう思いながらすが継る様な目で瀬七の方を見ると、腕を組んでうんうんと頷いている。

やっぱり本当だったのかー悪いことしたかもねー。

ああ、同じクラスだったネ、ゴメンとか一言謝っとけばよかったかも。

うあーマジかーすんませんー。

そう呟きながら、鎮西の方に向き直って軽くペコリ、と頭を下げてみた。

それでも鎮西は不満そうにみけん眉間にしわ皺を寄せている。

何がご不満なんでしょうか、女王様。

そう言うと今度は足の爪先、もとい靴の先で俺の膝小僧辺りを思いつき蹴ってきた。

なんだろう、俺しし座だけど今日の十二星座占いは最下位だったんだろうか。

「今日の占い第十二位は、ごめんなさい！ しし座のあなた。

全ての事で空回り気味。余計な事をすると相手の怒りを買っちゃ

うかも？

「お出かけ先では相手に対する言葉と態度に気をつけてね！」

みたいな感じで。ラッキーアイテムは何ですか。

「立ちなさい」

そんなゴミを見るような目で睨みつけられると背筋がぞくぞくしますー。

なんてことはなく、先程の占いに従って黙ったまま素直に立ち上がる。よっこらせ。

うむ、先程鎮西にやられた腹と右足の膝小僧が痛い。

そして立ち上がって再び鎮西を見れば、彼女が案外小柄だということに気がついた。

俺の身長が170？位だから正に平均的。ちなみに瀬七は164？だから少し小さい。

そして鎮西は、おそらく160？くらいだ。

10？って意外と差が大きい、と実感中。しかも鎮西さん細かいから、余計小さく見える。

さつきは威圧感とかオーラのせいでなんか大きく見えなな。

そこで、ふと気づく。

「質問よろしいですか」

「何よ」

コホン、と一息吐いて質問する。

「なんで、初めましてとか言ったんだ？ さっき自分で同じクラスだつて言っただろ」

「あーそれねー。あんたがここに来る前に赤石とちよつと打ち合わせしててね。」

なんか、あんたつて人の名前とか殆ど覚えてないとかいうし？

ちよつとした実験みたいな感じで試してみたのよ、私たちのこと覚えてるかどうか。

ま、案の定まったく覚えてないというか、知らなかったようだけどね。

百合奈は学級委員長なのに。
それで、ちよつとムカついて殴って蹴って衝撃波ぶつ放した、つてわけ。分かった？」

非常に（理不尽なことがとても）よく分かりました。
そういうことを伝えるため首を縦に一回振る。

もちろん、（ ）の中は伝えない。伝えたら次こそ殺される。

今度は満足したのか、鎮西は眉間に皺は寄せずに次の言葉を紡ぎだす。

「私が赤石に協力してもらって

あんたをここに呼び出した理由は、もう分かってるわよね」

「そりゃね。その北上のことだろ？

でも付き合えとかお前に言われても無理だ。そういうのは全部断る」

「そんなこと分かってるわ。そこら辺の事は全て赤石に聞いているか

あなたの趣味やら家族構成やら苦手な事とか過去話とか、ゼーんぶね。

個人情報保護法なんて、知ったこっちゃないわ」

「プライバシーの侵害だ！」

ビツと人差し指を鎮西のほうに突き出す。

それを顔を横に逸らすことで難なく避け、そしてそのままプイッと横を向く。

その指を右奥にいる瀬七に「お前もだ！」と言いながらまた指を突き出すと、へらへらと右手を振ってくる。

「ごめん宮本。いや、もう炎とか目の前に出されながら

脅迫おどしおどしなんかされたらさ、答えるしかないじゃん」

「……………いや、そうかもしれないけどさ。けどな！」

そんな状況でも言っただけで良い事と言ったら駄目な事があるだろ……！」

溜息を一つ吐いてから再び鎮西の方に向き直る。

まあ、確かに炎は怖いよな……………うん。

かくいう俺も炎引っ提げて脅迫まが紛いの事をされたことがある。

……………つか、あれやってきたの瀬七じゃん。

もうちよっと頑張ったら魔法法律裁判所で訴えられるんじゃない？

「話は終わった？」

「いや、ややこしくしたのはお前の発言だからな、絶対」

二足歩行

「そんなことはどうでもいいわ。さっきの話の続き。」

それでね、初めっから彼氏になれとか無理強いするつもりは毛頭もないわ」

「それなら俺にどうしろと」

頭上に回り続ける疑問符を浮かべながら鎮西に質問する。

彼氏にさせるつもりはない。関わらなくていい、ってことじゃないのか。

俺に何をさせるつもりかは知らんがとりあえず反抗心だけ見せとこう。

グ……、と鎮西に軽く唸^{うな}ってみると軽く無視された。

ついでに、更に冷たい目で見られる。

「だから、あなたには百合奈の友達になってもらおうと思ったの」「お断りします」

ジュワッ

そう言った瞬間、何かが燃えたような気がした。

次は何だと思いつながら全身を見てみると、俺の髪の毛の襟足の部分^{えりあし}が左側だけ襟足の生え際まで燃え尽きていた。

「ご丁寧にも直線が入っているように綺麗な焼け目である。

取り敢えず、皆さんそれがどうしたかと思うので、俺の髪の毛講座開講。

俺の髪の毛は男にしては長い。いわゆるロン毛、とか言うやつ。それが肩の辺りまで伸びてるもんだから長いもんだ。女子かっという。

加えて金髪だから、見ようによってはヤンキーとか悪い人に見えるかも知れない。

そんなこと全くないっすよ。

その髪の毛が左側の襟足だけ燃え尽きました。

だから俺の右側だけ隠せば横髪の長いショートカットの男。左側だけ隠せば髪の毛の長いロン毛男とかそんな髪状況になる。まあつまり、とてもカッコ悪い状況になっているのだ。

以上！！

「うっわ、宮本カット「悪い」」

「そんなこと言われんでもわかつとるわい！」

瀬七に蔑むように笑われ、怒鳴りつける。

次に鎮西に向かってギロツと睨み付けてみると、またそっぽを向いていた。

よく見ると肩がフルフルと震えている。

瞬間、クスクスと笑い始めた。

「うっわ、ププツ…カッコ悪い」

「ほんともう鎮西さん笑わないでください！　というか原因またあなたあああああ！！」

精一杯の怒りをぶつけても鎮西は尚、笑い続けていた。瀬七も然り。

しかも腹を抱えて大笑いしてるもんだから鎮西よりも性質が悪い。まあ、当然殴るよね。というわけで全速力で瀬七に走って近づき、頭を一発殴る。

なんか最近瀬七殴ってばかりだなあ、とか思いつつ更に足の脛すねを軽く蹴ってやった。

「っぬお！　ぐげっ」

奇声を上げながら瀬七が蹲しゃがむ。やり過ぎたか。

見上げてみると当然のことながら空が広がっている。

トンボの眼鏡がオレンジ眼鏡になるような夕焼け空が広がっていた。

明日は晴れだね、多分。

「これで懲こりたか瀬七。鎮西、さっきの話を続きー」

「ツプ…：分かった、分かった」

え？　何で鎮西に怒らないかって？

そりゃ暴力とか怒声上げたら次はどこを燃やされるか分かったもんじゃないからね。

無難むなんに生きよう。今日は運が悪いんだ。

一頻ひんり楽しそうに笑った後、鎮西はこっちまで歩いてきた。

「まだ友達になるのはお断りする？」

「そりゃまあ。ていうか友達になる理由を教えてください」

「そっか、そこから説明しないと納得しないわよね、この犬は」

犬じゃないっす。せめて二足歩行型の哺乳類でお願いします。

まあ、詰まるところの人間でお願い、ということだが。

そんな事を言っても無駄だと思い、取り敢えず話を聞くことにした。

例外が好

「まず、百合奈はあんたが好きというか、気になっております」
「ほう」

気になっている、という程度である時点で、好きとかそういう話ではない気がする。

女子つてのは分らんが、気になったら夜も眠れないもんだとは聞いたことがある。

それは好き、ってことで解釈はいいと思うが。

「それで、私はその事に気づいているということ、百合奈はおそらく知らないと思う。」

そこでね。友達の機転を利かせてやって、その恋を成就させてやるうという友達の思いやりが、今回の呼び出しに繋がってるの。

ただ、そこで問題点が発生するわ。

何しろ私と百合奈は、あんたと一切の接点がないから、その考えがそれ以降発展しないということに気づいたの」

「クラスメイトなんだから普通に話しかけりゃいいんじゃないかったのか？」

鎮西はそこで首を横に振って否定する。

「それがね、百合奈の恋心に私が気づいたのは昨日今日の話しじゃない。」

学年の上がるそれ以前、半年前からだった。

百合奈が、あんたの事を何時から好きだったのかは、私の知る所

じゃないけど

多分、何年も前から好きだったんじゃないかしらね」

片思いつてのは長ければ長いほどその恋焦がれる気持ちが強まるらしい。

その北上も、例外ではなかったんだろう、

当時は親友とは言えない程度に仲の良かった鎮西ですら、何となく気づいたという。

恋愛事に関してはワクワクするのは鎮西もらしく、北上の恋がすんなり叶うように

少し前から北上にはばれないよう、こそこそと準備していたらしい。

そこだけ聞いたらただの友達思いか、ただのお節介のように聞かせる。

でもいいやつなんだろう。しかし鎮西は大きく溜息を吐いた。

「けどまあ、百合奈ったら当時から何時まで経っても、告白する様子が見られなくてね」。

それで、数ヶ月前にちょっとした実行に移ったの」

その実行とやらが、俺と唯一親しい瀬七に干渉することだったらしい。

何でも、俺の情報を確実に手に入れるため先程瀬七が言っていたように、脅迫まが紛いの事をして親しくなったとか。

俺としては迷惑極まりないが、鎮西としては必死だったそうだな。脅迫紛いの事をされても仲良くなれるとは。

瀬七の懐の深さというか、腹の黒さで息が合ったんだろう。

それはさておき、美しい友情だと感心した。

それから色々やっている内に細かいことが面倒くさくなり、今回のような実行に移ったらしい。

「飽きっぽいんだな」

「だって何やっても実にならないのよ!? じれったいっただらありやしないわよ」

半年なんて長い長いー、と言いながら手を横に振る。
しかし、やっぱり鎮西の行動に違和感を覚えた。

「けどさ、そんなこと俺に伝えてどうすんだよ。」

そんな事言われても、逆に強く拒否することしかできねえ」

「ああ、そのことは私も思ったわ。でもね、そこを利用するの」

無理展開

「つまりね、友達になってもらって百合奈の良い部分見せ付けてあなたに百合奈を好きになってもらおうという魂胆よ」

「自分で魂胆とか言ったよこの人」

「事実だわ。そんなの偽っても仕方がない」

「そんな無理矢理なラブコメ的展開なんか聞いたことねえよ」

大体こういうのは、鎮西が俺に何も知らせないまま友達になってそこから北上と自然にくつつけさせる。

とか、そんな展開なら理解できる。

もう一回言うが、どこでも聞いたことねえよこんな展開。

「あなたが想像したような、じれったい何時成就いつ じやうじゆできるか分からない行動よりも

こつちの方が成果もちゃんと目に見えるし、地に足が付いた感じでいいじゃない」

「俺の考えが見透かされている、だと……!!?」

ゆつくりと太極拳の構えをとって、カツと鎮西に言い放つ。

また冷たい絶対零度の視線を頂戴するかと思いきや、今度は、蔑むような視線を頂戴し、ハンツと鼻で笑われた。

取り敢えず姿勢を元に戻し、土下座しながらすいませんでした、と謝る。

「何で土下座するの。みつともないわ、宮本」

「おおっ、名前呼んだ」

「そこかよ、おい」

出会ってから初めて名前を呼ばれ、驚いて顔を上げると若干引いている鎮西の顔があった。

さつきから空気状態だった瀬七が何時の間にか俺の後ろにしゃがんでいて、短くなっていない右側の髪をちよろちよろと弄いじっている。

「まあ、そんなわけで明日からよろしくね二人とも。

ご協力お願いするわ。拒否しても魔術で従わせることだってできるんだから。

そんな面倒なことされる前に自主的によろしくねー」

そう言っって手を振りながら魔術で扉をガン！ と開けて屋上から出て行く。

理不尽なことばっか言うやつだなー、とは思っていたがここまでとは思っていなかった。

人権とかガン無視だ。

人権？ 個人的人権の尊重？ 尊い一人一人の権利？ ハ？ 何

スか、それ。

そんな感じだ。

「……なあ瀬七、どうするよ」

まだ髪を弄っている瀬七に話しかける。

「そつだねえ……」

手を止めて瀬七が立ち上がった。

「取り敢えず、髪を切るうか」

そうだな、と言って俺も立ち上がる。

制服に付いている土埃ちちほこりを掃はらい、開けっ放しになっているドアに向
かって歩き出した。

早朝が嘘

今朝は休日だと言っのに6時30分に目が覚めた。

いつもなら平日でも7時30分に目が覚めて、慌てて学校に行くという

毎日毎日飽きないドタバタ劇を、自分にだけ披露しているというのに休日になってこの早起きという快挙っぷり。

誰か賞状してくれないものか。

がんばったで賞、みたいな感じで。

いや、もうありえないぞーとか言いながら、今日は何があったのか
と思っ

ベッドの傍にある小さな台の上に置いてある、月捲り式の小さいカレンダーを掴んで

じーっと睨みつけるように今日の日付を探す。

しかし、そこで今日が何日かを知らないのに気づき、のっそりとベッドから這い出して

ベッドの前に配置されている、勉強机の上にある水色の携帯電話をまた

ぐわし、と右手で掴む。

そして横にあるボタンを押して今日の日付を確認すした。

携帯電話の光が、寝起きのあたしの目には眩しいけれど

極度の近眼のせいによく見えないから、それでも顔に近づけてよく
見てみる。

「おー、しがつはつかーどよーびー……」

そう呟いて携帯電話を掴んだままベッドに向かってダイブする。ベッドのスプリングがギイギイいつているけれど、あたしは何処でも寝れるから寝心地が悪くても問題ない。むしろ快適になつてるかも。

しかしうつ伏せになるようにダイブしたので、鼻を打ったのかやけに鼻が痛い。

ちきしょー……と言いながら、左手をゆっくり伸ばしてまたカレンダーを掴む。

左に顔を向けて二十日を探してみると、そこには青い蛍光ペンで“AM7:00 補習”と書いてある。

「あ、やば」

そこで完璧に目が覚めて、今度は急いでベッドから跳ね起きる。まだ痛む鼻を押さえながらカレンダーだけをベッドに放り投げて一階にある洗面所に向かって猛ダッシュする。

慌しい、朝。

爽快視界

「取り敢えず顔洗って着替えて準備して……のわっぶ、へ」

ぶつぶつ予定を呟きながら階段をタンタンタン、と駆け下りていくと

足を滑らせて、ずでででと変な格好のまま階段を滑り降りてしまった。

「……つつ……う……！」

頭を押さえながらゆっくりと立ち上がる。

肘のあのぶついたら痛い所も思いきりぶつけてしまったようだ。

それも押さえつつふらふらしながら洗面所に向かい、取り敢えず顔を冷水でバシャバシャと水を辺りに飛び散らしながら洗う。

そのあと1DAYのコンタクトを慎重に、そつと人指し指で目に入れた。

今日はすんなりと目に痛みもなく入ったみたいで、なんだか嬉しい。

朝からぼやけていた視界が鮮明になり、気分がすっきりとする。

肩より少し下まである金色の髪をゆっくりと櫛で梳かし、黒い髪ゴムで二つに結う。

そして両耳には水色のピアスを一つずつ付けた。

ピアスは付けていても校則違反にならないので、本当にありがたい。

装飾品の一つでも身に付いていないと、なんだか落ち着かない。

余談かもしれないけれど、あたしの髪は、金色一色ではない。

頭頂部の髪の色だけ、こげ茶色に染まっているのだ。

まあ、そんなプリンみたいな色層にしたのは、趣味なのでご了承を！

また階段を駆け上がり、クローゼットのある部屋に行き制服を引っ張り出す。

あたしの通う学校は、男女とも冬夏通して似たような制服で、冬服は白ブラウスに濃紺のブレザーもしくは各自で好きな色のセーター。

指定セーターが無いので楽。そして女子は黒い布地に白いラインが一つあるスカート。

男子は上は女子のそれに黒いズボンの組み合わせ。

リボンとネクタイはどっちも赤色で、靴下は黒。こんな感じの一般的な制服。

中学正の時のセーラー服よりは可愛いからマシかな？　と思う。

夏服はブレザーが無くなってブラウスが半袖になっただけ。もしくは、ベストとか自由に着てもいい。

リボンとネクタイは基本付けるけれど、付けなくても怒られないからあたしは付けていない。

本当に自由な制服スタイル。どうせなら私服にしてくれって思うけど制服じゃなくなったら何年ですかアナター、みたいな感じになるよね！。

それはそれで面白いと思うけど。

そうこうしている内に制服に着替え終わった。

部屋に戻って通学鞆に必要な物だけを放り込む。

現在時刻AM6:47。携帯電話も鞆に放り込んで、準備完了。
本当に急げばこんなに早く準備ができると知って、感心。

滑り落ちないように階段を急いで降りて、鍵を持って玄関に向かう。

一軒家のわりに靴は二、三足しかない玄関で指定のローファーを履いて立ち上がる。

家を出る際に「いってきます」と言った。

あたしの他に、この家にはもう誰もいないというのに。

盲目抱擁

こんな事を言う親が死んで一人暮らしをしてる学生っぽいけれど
実際、そうではなかったりする。嘔吐いてごめんね？

親、現在進行形で生きてます。超若い。バリバリ。

あたし、一条萌いちじょうもへはあの家族にとって所謂いわゆる、いらぬ存在だった。
育児放棄とか虐待とか、そういう物は無かったけれど
子供の勘つてのは鋭いらしくなんとなく気づいた。

ああ、この子産まなきゃよかった、っていう両親のあたしを煙たが
るような視線に。

気づけば両親はこの小さな二階建ての一軒家を建てて、あたしに生
活させている。

やだねえお金持ちは。何でもかんでもマネーで解決させようとする
んだから。

初めこそ悲しかったけれど、この生活も五年目。もう慣れてしまっ
た。

料理は未だに下手だけどこのご時世には、コンビニエンスストアと
いう名の

文明発達の証し的なものがそこらにあるから特に困っていない。

生活資金も定期的に送られてくるから、結構自由な生活っぷり。
自由だー、イエー！ みたいな感じで取り敢えず叫んどこう。

「イエー」

そう言って鍵を閉める。ご飯を食べてないから

お腹が空いて死にそうだけど、わき目も振らずに道路を駆け出す。

ご近所さんとかまだ誰も出てきていないけれど、車は相変わらず走っているから

邪魔にならないよう端の歩道を全速力で駆ける。

運動はできるけれど一kmを全速力で走るのは大変で、途中で息切れした。

それからは歩いて学校に向かう。

学校の正門に到着した時、7時のチャイムが鳴り響き慌てて再び駆け出した。

校内にあまり人がいないのを不審に思いながら三階まで駆け上がる。痛む脇腹を押さえながら教室の戸をガラッと、思いつきり開けた。勢い余って戸が横に思いつきりぶつかって、バアン！と音が鳴る。その瞬間、教室にいるクラスメイトが全員こっちを向いた。

「あれ？」

教室の中には、まだ二、三人くらいの子しかいなかった。

教室前方の壁に掛かっている時計を見ると、現在時刻AM7:06。とつくに補習が始まっているはずの時間。けれど、教室にいるのは二、三人。

彼女達に視線を向けると、皆不審な目をしてこっちを見ている。

全員、真面目な子ばかりであたしと親しい子は一人もない。

普段不真面目とか、そう評されているあたしが息切れして急いで入って来たから

変な目で見られているんだらうけど、とても居心地が悪い。

見んじゃねーよー、という意味を持たせた視線で彼女たちを見ればさっと視線を逸らされる。なんだこの子ら。

「ももちゃーん!」 がばっ

「どあつぷ」

後ろから何者かに思いつきり抱きつかれ、思わずつんのめる。

「ちよっと、こいね 琴音……痛い……」

「あ、ごめーん」

抱きついてきた人物、友達の黒崎琴音がパツと離れた。
えへへー、と笑いながらあたしの前に回りこみ、また抱きついてくる。

琴音は身長が低く、それに対してあたしはそこそこ高いので彼女の腕があたしの胸の下に回りつく感じになる。

キラキラ目を輝かしてあたしを見上げてきた。

琴音の眩しさに、少し目を細める。

「おはよー、ももちゃん」

「うん、おはよティンク。今日はえらく機嫌がいいねー」

「あ、わかるー？ 朝からももちゃん見つけたから嬉しくってー」

ももちゃん、というのはあたしのおだ名だ。

どうやら琴音はおだ名をつけるのが好きらしく、何にでもおだ名を付ける。

物にも名前を付けていて、この前は愛用の携帯電話を
べていちちゃん、と呼んでいた。少し子供っぽい所がある、あたしの
大事な友達。

うへへ、と琴音が変な笑い声を上げた。

そんな琴音をさながら相撲のように押しつつ自分の席に向かう。

心は誓約

「ねねね、何で今日もちちゃん早いの？　なんでなんでなんで？」
「ちよつと落ちつこつかー、琴音」

へい待ちなガールー、とふざけ合いながらあたしの席に辿り着いた。

そして、琴音を引っぺがして自分の席に座る。琴音も自身の席に着く。

琴音は後ろの席だからあたしが後ろに振り向いて話し出す。

「何でももちちゃん今日早いのー？」

「早起きしたから以外に他ならぬのよー、琴音。」

それより、今日の補習って7時からじゃなかったの？」

「えー違うよー早すぎるじゃん。今日は7時45分からだよ」

なるほど、カレンダーに書いた予定を間違っていたらしい。

いつもは普段の学校と同じ8時55分からだけど今日は、教師の集まりがうんたらかんたらで

時間が変わる、と担任が先週言っていたことを思い出す。

早いつて、7時45分は。

それより何であたしは書き間違えたんだー。心の中で絶賛後悔中。朝の慌てっぷりが記憶のDVDに録画されていて頭の中で再生されている。

正しく書いとけば30分後に出ても問題なかったのに。

「今日早いのはねー、早起きもあるけど時間を覚え間違えてたの」
「そ・なんだー、ももちゃんあわてんぼうさんだねえ。」

「琴音もね、今日は早起きしちゃって予定より早い電車で来たの。
いつもと違う時間だから困っちゃうよねー」

「そーねー」

「語尾をゆるゆる延ばしてのんびり会話する。」

「いつももう少し早く来たら、こんな風に会話できるかなー、とか
思い普段の起床時間を改善しようと思案中。」

「どうせ改善されないだろうけど。」

「琴音は電車通で、隣の市からこの学校に通っている。」

「だから、琴音とはこの学校に通い始めてから友達になった。」

「今ではすっかり仲良しになっていて、親友の内の一人になっている。
る。」

「愛してるよー、琴音ー」

「えー、ほんとにー？　ありがとうー」

「こんな風に冗談を言っても可愛く返してくれるから、可愛いかぎ
り。」

「多分琴音は、今が可愛い盛りだと思う。」

「ニコニコといつも笑っていて、大きくてつぶらな瞳をいつもパチ
パチと瞬かせている。」

「琴音の亜麻色で長い髪は、本当に綺麗。下ろしているため風が吹
くとサラサラと揺れる長い髪は、透き通って見えて、本当に綺麗。」

「こんなにも綺麗で、しかも染めていないなんて。黒髪からプリン
色層に染めたあたしとは大違いだ。」

「腰まで届くその長い髪は、染めたせいで所々痛んでいるあたしの
髪とは大違いで、少しも痛んでいない。」

そのおかげで、普通の茶髪の子よりも三割り増して綺麗に見えるという、なんてお得な補正。

黒髪が嫌だから染めただけなのに、なんとというあたしの髪の汚さ。「あれ、今日のももちゃんすっぴんぴんだね。マスカラもしてないよー」

「ああ……急いで来ちゃったから、ご飯も食べてないしメイクもしてないねー」

「ふふーでも可愛いー。すっぴんももちゃん久し振りだけどメイクなんかしなくて、十分美人だよ。うらやまーしー」

そう言っただけで琴音があたしの顔をじっと見つめる。

琴音や皆はあたしの顔を超可愛いー、だとか美人ーとか言うけど、あたしはこの顔が超可愛いとは思わない。

そりゃまあ、人並み以上にはモテたり告白されるけど、性格で言えば琴音の方が良くて

顔なら二年生が一番美人とか言われている赤い髪の子の方が、絶対良いと思っている。少なくともあたしよりは。

まあそんな顔だから告白されるのにも飽きて、去年彼氏を作ったからそんなに玉砕確定の告白をされることも少なくなった。

はつきり言っただけでも迷惑で、不快度指数は120%越えだった。顔が良いからって言い寄ってくるような人に、あたしは興味がない。

まあ、今の彼氏にも特別な感情なんて、抱いてないけれど？

「ももちゃんはねー、三年生、ううんこの学校でいっつちばん可愛いのー！」

でもメイクしたらもっと可愛いのー！というわけで、この琴音が

もちちゃんに

「琴音流メイクをお顔にほどこしてあげましょー」

「いや、あなた今メイク道具持ってないじゃない。どうやってやるのよ」

「それはー……魔術ー。それー！」

それー、と琴音が言つと同時に掌をあたしの顔の前に開いて横にさつと振る。

その時、なんだか暖かい風が吹いた。

手を下ろした琴音が鞆を開きピンクの置き鏡を取り出して、あたしの前の机に置く。

「いかがでしょーか」

「おー、新鮮だね。ありがとう」

「どういたしましてー」

そこにはナチュラルだけれど、しっかりとメイクされたあたしの顔があった。

そのメイクは、あたしがしたことないものだから仕方はよく分からないけれど、なんだか気に入った。

後でこのメイクの仕方を教えてもらおう。と心に誓う。

喧嘩上戸

「うふふー、かーわーいーいー。ぬ、あやや来たよーももちゃん」

そう言つて、後ろの扉から教室に入ってきた友達の高坂あやに向かつて

琴音が右手を大きく上に上げてぶんぶんと振る。

あやも苦笑いしながら片手を小さく上げた。

あやや、というのはあやのあだ名だ。

……何処かで聞いたことある、とかいうのなしの方向でよろしく。

遅いー、と琴音が言いながら今度はあやに抱きつきに行った。

抱きつき魔だなー、と思った。あたしも琴音に会ったら一回は抱きつかれる。

そんな抱きつき魔・琴音の頭を撫でながらあやがこっちに近づいてくる。

「おはよう一条。今日は早いんだな」

「ま・ね。珍しいでしょ」

そつだな、とあやが言つてあたしと同じ様に琴音を引っぺがして席に座らせる。

あやは少々男勝りな性格で、だなどかくだろ、みたいな男らしい口調で喋る。

肩甲骨辺りまで伸びた黒い髪をポニーテールにしている。

正に日本人ー、みたいな見た目。

だけど口調は男らしいから、少しだけミスマッチ。

身長も170cmと、女子にしては長身でカッコいい。身長分けてください。

「琴音と一緒に来たんじゃないの？ いつも一緒に登校してるらしいけど」

「いや、一緒に登校はしたんだが生徒会室に用事があったって、少し寄ってきたんだ」

「琴音は待とうと思ったのに先に行け、って言われちゃったのー」

琴音がぶーつと拗ねてあやがすまん、と宥めるいつもの光景。

そこであたしは干渉せずに二人をにこやかに眺める。

これがあたし達の会話の光景。いつも三人で行動しているから

あたし達を見かけたら、大体この光景が見られると思いますです。

生徒会室に用事、というのはあやは凄いことに生徒会の副会長だから多分生徒会室に忘れ物とか、生徒会長に用事とかあったんだと思う。

突然お腹がくう、となる。

途端に顔が熱くなり、まだ目の前に置いてある鏡を見てみるとほんのりと頬が赤くなっていた。これは恥ずかしさの赤。

二人に気づかれていないかと様子を見てみると、

まだキヤツキヤツと話していて少しだけ安心する。

脇腹を強く押すとお腹が鳴らない、と聞いたことがあるから隠れるようにこそこそと、ぎゅーっと親指で脇腹を押してみる。それでもお腹が膨れるわけもないくて

恥ずかしながら何か持っていないか二人に尋ねてみることにした。腹が減っては戦ができぬ、とはこの事ですか。違うだろうけど。

「だからね！ あややはいつつも琴音に冷たいのー！」

「そんなことないぞ。いつも甘やかしてあげてるじゃないか」

「琴音、甘やかされてないもん子供じゃないもん！」

ていうか、甘やかして“あげてる”って、何それー！？」

いや、話しかけようと思ったんですけどね、更にヒートアップしてるんです。

琴音がキーって言って、あやに噛み付く。

食ってかかる、という意味で。

この二人、幼馴染らしいけど本当に仲が良いのか怪しくなってきた。傍から、というかあたしから見たら

お母さんと子供が喧嘩してるみたいに見えて、少し面白い。

「はい、ストーップ」

そんな二人を仲裁するのもあたしの役目。
琴音の小さな後ろ頭を軽くちヨップする。

「琴音、言いすぎだよ」

「ももちゃんはややの味方なの……」

「そうじゃない。皆で仲良くしようって、そううただけだよ。はい、
仲直り」

「むー……ごめんねーあややー」

「こっちこそ、すまないな」

琴音がしょぼんとした雰囲気のまま頭を下げ、あやがその頭をまた撫でる。

うへへー、と琴音がまた変な笑い声を上げた。けど、その顔は幸せそう。

やっぱりあやの言う通り、琴音は甘やかされていた。

食欲増減

「そういえば、電車に乗る前にコンビニに入ってきたんだが、少しパンを買いすぎたんだ。二人とも食べないか？」

あやがそう言ってバッグから六個パンを取り出して、琴音の机の上に並べる。

気になるラインナップは、気軽に食べられる、と今流行のランチパックが三つに、アップルパイが二つにメロンパンが一つだった。

あたしから何かない？ と聞こうとしたのに向こうから出てくるのは。

まさに、棚からぼた餅という感じ。よく食べるあやに感謝。ちなみにあたしは少食。

「自分が食べる分だけ買えばよかったのに」

そう言いながらも心の中では嬉しくて仕方がない。

これちょうだい、と言いながらランチパックのNew！と書いてあるシールを貼っているやつを指差す。

ん、と言いながらあやがあたしの方にポンッと投げしてくれる。

よく見てみると何とかミルクと書いてあって、とても甘そう。
袋をバリッと開けて一口食べてみると、案の定甘かった。というか
甘すぎる。
少し吐きそうになりながら、黙々と食べる。

「ん〜あまあま〜」

あたしと同じパンを食べている琴音が、幸せそうな顔でパンを頬張
っている。

あやはアップルパイを食べながら、ぞろぞろとやって来るクラスメ
イトに
欲しがられるパンを投げながら、投げ返ってくるお菓子を鞆に入れ
ている。

教室内でお菓子が飛び交っている、という非常にありそうでない光
景。

これをシュールって言うのかな。

あっという間にパンは完売。

あたしも食べ終わったパンの袋を滓が出ないように、丁寧に折り畳ん
で鞆の中に入れる。

口の中に残っている嫌な感じに粘っこい味を
琴音が飲んでいたお茶を貰って口直しをする。

うえー、気持ち悪かった。今度からミルクのパンはお断り。

その後もだらだら雑談していたらチャイムが鳴って、教師が入ってきた。

さあ、面倒くさい学校の始まり始まりー。

補習なんて関係なくて、あたしの頭の中は帰ったら何かをするかです。いっばいだ。

鮮明断髪

髪のを切ったら失恋した証。

そう考えるのは漫画の読みすぎとか、メルヘンチックな乙女なんだろうけど。

じゃあ、男の場合はどうなんだろう。女子のように肩まであった髪のを

ばっさりと切って、うなじが見え隠れするような長さになった。

「切りすぎじゃね?」

「そつでもないよ」

俺たちはあれから一旦教室に戻り、運良く鍵のかかっていない教室の中で髪を切っていた。

というか、俺が瀬七に髪を切られている。

理由は単純明快。鎮西に奇妙な髪型にさせられたから。

あれから帰ろうとはしたけれど、この髪型のまま帰って

道行く人に注目されるのは嫌だ、というわけで

髪を切るのに慣れている瀬七にちまちまと髪を切り揃えてもらっている。

なぜ髪を切り慣れているか、というと俺は知らないわけだけど

ぺちやくちゃと楽しそうに話しながらジャキンジャキン、シャキン

シャキンと切っている。

そのぶんにはああ、慣れているんだなと納得。

耳元で鋏が髪を切ったり空気を切ったりする音が聞こえる。

それが交互に聞こえるもんだからなんだか眠くなってくる。

眠気を吹き飛ばすように頭を軽く振ると、ぎゃ、と瀬七が言って頭を抑えてきた。

「動くなよー宮本」

「おーごめん」

乾いた笑い声を一つ上げ、少しだけ姿勢を正して前を見据える。

普通に俺の席に座っているから、前方には本とか置いてある棚があるわけで

右斜め前にはでかい黒板が、でーんと構えている。

目線だけを下に向けると俺の髪の毛が少し散らばっていて

左にある窓から差し込む夕日でキラキラと少しだけ光っている。

地毛だからねー、綺麗だねー。

* * * * *

「よし、終わったよー」

ポン、と背中を叩かれてハツとする。

あれからいつの間にか眠ってしまっただみたいで、時計の長針が3から5に移動している。

床下にある俺の髪の毛もさつきより量が増えていて、時間が経っていることを証明していた。

「気に入らない部分があるかも知れないから、鏡見てきな」

瀬七が俺の肩にかけていたタオルを除けて、首筋を払ってくれる。言われるがままに廊下へ出て行き、水道にある鏡の前に立つ。

鏡を覗き込んでみると、いつもと何か違う俺の顔があった。

「髪が短いから当然か」

自分でノリツッコミ、自問自答をして

顔を横に向けたりして全体的にどう変わったか見てみる。

肩まであった髪の毛が一気に短くなったから違和感が満載で、恥ずかしい。

でも何を間違ったのか、以前はセミロング風の女子みたいな髪型だったのに

今度はショートカットの女子みたいな髪型になっている。

頭をわしわしと搔いて少しだけぼさぼさにしてみる。

でもサラサラとした髪質のせいで、少し撫でたらすぐに元に戻ってしまった。

髪形を少しだけ変えるのを諦めて、瀬七の待つ教室に戻る。

彼氏彼女

「気にいったかい？」

「じょーじょー」

教室に戻ると瀬七が床に散らばっている髪を箒で掻き集めていた。それに習えとばかりに掃除用具箱からちりとりを出して、髪の毛が集まるのを待つ。

新聞敷けばよかったなー、と思いながら

ここには新聞が無いのでその後悔の念は、抹消。

瀬七が髪の毛を集め終わり、俺の持っていたちりとりに入れる。

それを持って教室前方にあるゴミ箱に入れようとするが、いったん休止。

「……あのさ、瀬七。ここに入れたら朝大量の髪の毛がゴミ箱に!？」

「みたいな感じで騒ぎになるんじゃないの？」

「そだねー……じゃあ、食べる？」

「なんでだよ!」

もう変な返事する瀬七嫌だ!!

考えるのも馬鹿馬鹿しくなったから、ちりとりごとゴミ箱へ放り投

げる。

ガコン、と音を出しながらゴミ箱の中にちりとりが綺麗に納まる。それを無視して席に戻った。

……ちりとりを戻せて？ 汚いから無理無理。

「はは、不良だ」

「うるっせえ」

机の上に置いてあった鞆を掴み、瀬七を置いて教室から出て行く。ちよつと待てー！ みたいな声が聞こえた気がするけど、無視。階段を下りようとしたところで、瀬七が追いついてきて隣に並んできた。

「お前は彼女か！」

「ちげーよ！」

「だったら隣に並ぶな！」

「いーじゃんどうせ行き先同じだし！」

ギャあぎゃああと叫び合い、騒ぎながら校舎から出て校門を出る。

徒歩の想

校外に出ると騒いでいると人目も憚られ、自然と言い争いも納まる。今日の夕飯何にしよう、とか課題めんどー週末課題めんどー、みたいな。

他愛もない事を考えながら瀬七と会話しつつ、のろのろと帰る。

「じゃ、またな」

5分も歩かないうちに瀬七と別れる。

さっさと帰ろうとする瀬七を、なんとなく引き止めた。

「なんだい？」

「あー……あのさあ、俺、どうしたらいいと思うっ、」

「何が？ 課題？」

「ちがわい。鎮西のことだよ」

ああ、と瀬七が納得したように頷いた。

今日は木曜日。明日は必然的に金曜日だから、教室で鎮西に会う。いや、その前に本当に鎮西と北上っていうやつがいるのか、確認し

なければいけない。

クラスのやつの名前を覚えているか指を折りながら考えていたら、両手で足りた。

自分で考えていて空しくなったが、クラスに何人いるかが分からない。

取り敢えず、その十人がクラスメイトってことにしよう。

「やってみるだけの価値はあると思うよ。

そりゃあ君が納得しきっていないのは、分かっているけれどね。

「上手くいけば友達ゲット彼女ゲット、みたいな感じで一石二鳥じゃないか」

「そついうけどさあ……」

「僕もこの件には関わっているんだから、たまには相談に乗るよ。頑張れよー宮本。応援してるから」

じゃ、と言って手を振りそのまま瀬七が小走りで帰っていく。

どこまででも我関せず、みたいな態度をとるから何時まで経っても掴み難い。

それが瀬七なんだけど。

いや、それは個性でいいと思うけれど

もうちょっと親身になって考えてくれないか、と思う。

仮にも親友なんだしさあ。

とぼとぼと歩いている内に家に辿り着いた。

俺の家はどこにでもあるような普通の一軒家で、茶色の塗装をしてある。

それに加えて小さな庭と駐車場があるから、まさに一般家庭。

ガチャガチャと鍵を開けて家の扉を開け

ただいまー、と家の中にいるであろう人物に向け言っ。

「ただいまー……あ？」

俺の視線は玄関から上がり廊下になっている場所に注がれる。

そこには、人が倒れていた。

姉の物臭

「片付けてください」

姉の拍手に対抗するように、俺も一回パンツ！と手を叩き空気を変えた。

姉はぶつぶつ言いながらしゃがみ、自分の長かった髪の毛を手で摘んでは自分の脇に積み上げている。

髪の毛の量自体は少ないのに一本一本は鬱陶しいほどに長いから、すぐに小山ができる。

しかし姉の行動はのろのろしたもので、遅い。
大半は途中から手伝った俺の成果だ。

先ほども言った通り、俺の姉は引きこもりだ。

ニート、とも言える。

なぜ姉が引きこもりなのか、ということ俺は知らない。

けれど俺が記憶している限りでは、俺が小学六年生、姉が高校二年生の頃から引きこもりだ。

つまり俺たちの年の差五年前から殆ど引きこもっている、というわけ。

姉がそれだという事に気付いたのは中学生になった頃で、その時には、姉は既に高校を中退していて、家籠りの準備が万全だった。

それからは殆ど家から出ず、外に出ることが週に一回位なのが普通になった。

何年か前、姉に家で普段何をしているのか、と聞くと超健康的な答えが返ってきた。

まず、6時起床。この時点で健康。

俺が起きるのは大体平日でも7時でそれからパツと準備をして登校している。

しかし姉は違う。

起きた後は、部屋に備え付けの地デジ対応済みのテレビでニュースを見て6時半になったら番組を変え、朝の体操を二番までしっかりやっているらしい。

朝の体操とか懐かしすぎてどんなのかは忘れたから、今度一緒にやってみよう。

朝の体操が終わると次は柔軟体操をすと言っていた。

それから一階に下りて、朝食を自分で用意して食べている。

用意、といっても姉は壊滅的に料理ができないから、少し焦げている焼いた食パンを食べ、牛乳をコップ一杯だけ飲むだけなのだが。

しかし、健康的なのはここまでだ。

この後姉は昼食もとらず、俺が帰ってくるまでずっとテレビを見ているか、ゲームをしている。

姉は細身でとても痩せているが、高校生男子以上によく食べる。

大人、だからね。

朝は食欲が無いからあんな簡素な朝食なんだ、と言っが単に料理ができないだけだろうが。

ふざけんじやないよ。

昼食もとらず、お菓子もアイスも食べない姉は、空腹で家の中でぶっ倒れていることが多い。

帰ってきたら殺人現場跡、みたいなことがあるから何とか姉に料

理を教えようとしたことはある。
しかし無駄だった。

何か一つ教える度にその前のことを綺麗さっぱり忘れる、という大変素晴らしい記憶能力を持っていたからだ。

その姉のおかげ、というわけではないが俺はそこそこの料理とか家事が得意な高校生男子と化していた。

なんとも嘆かわしい事態だ。

そんなこんなで五年の年月が過ぎ、今に到る。

因みに夜はヨガして、俺が太極拳の構えと一緒にとってから夜中の2時頃に寝ているらしい。

らしい、というのは、俺が最後まで一緒に太極拳なんざやっているわけではないからだ。

しかし、こんな時間に寝て6時に起きられるのだから羨ましい。

さて、皆さん。

どうして、先ほどのえびぞり腹這いジャンプを、ニートで引きこもりの姉ができるのか。

お分かりいただけただろうか。

日頃の体操とか簡単な筋力トレーニングをしている姉はなぜか、超人的な身体能力を手に入れていたからだ。

俺は姉の身体能力に関しては興味が無いが、姉がどれくらい体が柔らかいのかは見てみたい。

もしも人類を凌駕りょうがしているとしたら、恐ろしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5117y/>

でいばいyouth

2011年11月22日04時02分発行